

KSK

発行 KSK 神奈川県障害者定期刊行物協会
〒222-0035 神奈川県横浜市港北区鳥山町1752番地
障害者スポーツ文化センター横浜ラポール3F 横浜市車椅子の会内

あゆみ会報

編集 湘南あゆみ会
〒254-0807 平塚市代官町21-4 SEA平塚ビル3F フレンズ湘南内
TEL/FAX 0463-24-0420
定価 50円（会員は年会費に含まれています）

2021年 9月号 第169号

報告



●じんかれん主催 電話相談員研修会

8月12日 ひらつか市民活動センター会議室において行いました。 9名参加

じんかれんでは毎週水曜日、家族相談員が電話による相談を受けています。相談内容は、病気の症状のこと、対応のこと、医療機関のことなど様々ですが、相談員はどのような内容の電話でも心を傾けて傾聴し、かけてきた人が安心するような対応をしなければなりません。この度は相談員のレベルアップのため、また、新規相談員の開拓のため、心理カウンセラーの井上雅裕氏を講師に招いて研修の機会を持ちました。

どこまでお手伝いするか、傾聴で留めるか、更に改善、回復を目指すか、主訴の聴き方、纏めのし方、さらに相談員の精神年齢、関心を持って受け止められる領域の広さ、価値観の広さなどが相談する人に安心感を与えるなど、大事な点の指摘があり、貴重な学びの時となりました。

●8月サロンあゆみ

8月20日に行われたサロンあゆみには11人の参加者があり、活発な交流の時となりました。今回は小さな島を4つ作り、自由に話しあえるようにしました。ここへ来るとほっとすると数か月振りで来られた方、仕事の合間をぬって来られた方、話し合えることを楽しみにして来られた方、などなど、2時間半があつという間に過ぎました。

9月は17日（金）13：00～



これからの予定とお知らせ

- ◆9月21日（火）じんかれん面接相談日
ユニコムプラザ相模大野 13：00～
- ◆10月5日（火）じんかれん理事会
かながわ県民センター 10：00～
- ◆10月7日（木）8日（金）みんなねっと全国大会（東京 調布市 ほか）
- ◆10月12日（火）じんかれん相談員養成研修会
ユニコムプラザ相模大野 13：00～
「座間市アウトリーチの実際」
講師 ソーシャルワーカー 佐藤陽子氏
- ◆10月15日（金）サロンあゆみ 13：30～
ひらつか市民活動センターB会議室
- ◆10月19日（火）じんかれん面接相談日
ユニコムプラザ相模大野 13：00～
- ◆10月25日（月）心理カウンセリング勉強会
ひらつか市民活動センターA・B会議室
13：30～15：30
講師 心理カウンセラー 井上雅裕氏
前回も好評の勉強会です。会場は30名入れます。ご都合をつけてご参加下さい。
病気の方の心理を理解することで対応が変わってきます。良い対応は回復に繋がります。
コロナ対策を十分行ってからご参加下さい。



「身体拘束」に「幽閉」...日本の精神科病院の”深すぎる闇” 元患者や遺族が語る残虐性

クーリエ・ジャポン 8/24（火）より抜粋

精神科医療の分野では過去数十年で、多くの国が地域コミュニティを基盤としたメンタルヘルスケアやセラピー両方に移行してきた。ところが、日本はこの潮流に逆流し、精神科の病床数を増やして患者をどんどん入院させ、身体拘束や監禁などの残酷な処置が頻繁に行われていると、米紙が報じている。

入院から2週間後に死亡

睡眠障害に苦しんでいた大畠一也は、統合失調症と診断された後、自ら数回にわたり石川県内の精神科病院に入院していた。しかし、2016年の入院を最後に当時40歳だった彼は帰らぬ人となった。入院して8日目、彼はベッドに拘束された。更に6日後、拘束を解かれた彼は息を引き取った。

父親の正晴（70）と母親の澄子（68）は、少なくとも7回病院を訪れ面会を求めたが、その度に追い返されたと語る。息子が拘束されていたことも知らされていなかった。そして入院から2週間後、息子が死んだという電話を受け取ったのだった。

「息子に会えなかったことが、一番悔やまれます」と金沢市内の自宅で正晴は語った。「もし、会えていたら、病院で何が行われていたかを知り、息子を連れて帰ることができたでしょう」

日本には巨大な精神医学業界が存在するが、その実態は長らく世間の厳しい目にさらされてこなかった。だが近年、元精神病患者やその家族らが損害賠償を求めて訴訟を起こすようになり、長期間にわたる監禁や、頻繁に行われる身体拘束、さらに残酷な治療法が明るみに出つつある。

日本とその他3ヶ国における精神科病棟での身体拘束について研究を行っている杏林大学の長谷川利夫教授（精神障害作業療法学）は言う。

「精神医学業界というのは日本で大きな力を持っています。ですが私たちは今ついにこの問題をオ

ープンに語ることのできる段階にきているのです」

身体拘束の確率はニュージーランドの3200倍

医学誌「疫学と精神医学」に掲載された長谷川の研究論文は、精神科病棟での身体拘束という問題に焦点を当てた先駆的研究だ。それによれば、日本の精神病患者が身体拘束を受ける確率は、アメリカの約270倍、オーストラリアの600倍、ニュージーランドの3200倍になっている。

日本では精神病患者を収容する病床が大幅に拡大されており、病院側は利益を上げるため、その膨大な病床を埋めておく必要があるという。

長谷川によれば、きちんとした教育や経験を積んだ精神科スタッフの不足もまた、身体拘束に依存しやすい状況を生んでいるという。患者が自身や他者に危害を加えるリスクが全くない場合でさえ、腰と手首、足首を縛り付けるのだ。

縛られて何日も続くと、深部静脈血栓症のリスクが高まる。これは長時間のフライトで起こることのある「エコノミークラス症候群」と同じ症状である。

日本の精神科の病床数はアメリカの5倍

日本の精神医療が世界的に注目されたのは2017年のこと。ニュージーランド出身で双極性障害に苦しむ英語教師が、日本の病院で10日間にわたりベッドに拘束された後亡くなった。読売新聞はその後のわずか4年間で、身体拘束による死亡が47件も起きていると報じている。

長谷川が11軒の病院を調査したところ、ベッドに縛りつけられた患者たちは平均して96日間も拘束状態に置かれていたことが明らかになった。厚生労働省の調査では、ある男性患者が15年以上も拘束されたままだったことが判明している。

統合失調症だった大畠のケースでは、病院側は当初、彼は心不全で亡くなったと主張していた。しかし、両親が解剖を依頼した結果、大畠はきつく縛られたことによる深部静脈血栓症に陥っていたことが明らかになった。

そして2020年、画期的な判決が下される。名古屋

屋高裁金沢支部は、大島の拘束は「違法」だったとし、遺族に 3520 万円の損害賠償を支払うよう病院側に命じた。日本の法廷がこのような判決を出したのは初めてのことだ。

病院側は日本精神科病院協会の指示を受けて上告。同協会の山崎学会長は、多くの場合、身体拘束は適切に行われていると主張している。

経済協力開発機構 (OECD) の統計によれば、2016 年時点で日本の精神科の病床数は 33 万 4000 床にものぼる。それは世界全体の精神科病床数の 5 分の 1 を占め、アメリカの病床数の 5 倍にあたる。ちなみに日本の人口はアメリカの 3 分の 1 ほどだ。この日本の病床数の多さについて山崎は、日本では精神科病床の定義を他国よりも広く解釈する傾向があると話す。

注射を打たれ、電気ショックをかけられ

権威ある医者が患者に決断を下せば、患者の家族らはそれに異論を唱えることは難しい。そして患者がいったん入院してしまえば、多くの場合退院は困難となる。

かつて精神科病院に入院していた伊藤時男 (70) は、そこから出ることが如何に難しいかを身をもって知っている。彼は健康だと自覚していたにもかかわらず、40 年以上も閉じ込められた。退院できたのは、思いがけない運命のめぐりあわせがあったからで、それがなかったらどうなっていたかわからない。

伊藤は現在、人生の大半を奪われたとして、政府を相手取って訴訟を起こしている。

伊藤によれば、彼は早くに母親を亡くし、父親の再婚相手となった継母は彼を受け入れてくれなかったという。そして 10 代で、自分は皇室と血縁関係にあるという妄想を抱き始めた。

16 歳の時、伊藤は東京にある精神科病院に入れられた。そこでは気絶させる注射を頻繁に打たれたほか、病院スタッフが罰として患者に電気ショックを与えることが一般的に行われていたという。2 度にわたって逃亡を試みた伊藤だったが、その

度に連れ戻されてしまった。

5 年後、福島の病院に移された。薬の量は徐々に減らされていき、20 代前半には社会復帰できる状態だと感じ始めていた。「最初は退院について病院側に尋ねてみました。けれどすぐに受け入れてもらえないと悟り、それからはもう、頼んでみる事さえ諦めました」と伊藤は振り返る。そして彼はその後 40 年間を病室の壁に囲まれて生きることになったのだ。

「病院は利益しか考えてなかった」

伊藤の状況が一変したのは 2011 年に東日本大震災が起き、入院していた病院が倒壊したためだ。伊藤は別の病院に移送され、そこの医師らがついに退院を認めた。だが既に 61 歳になっていた伊藤は、全く新しい世界に直面する。

「病院から出ると完全に浦島太郎状態でした。ATM なんて見たことも使ったこともありません。電車の切符の買い方も分らず、携帯電話を使ったこともなかったのですから」

入院中の伊藤は、年に一度父親が訪ねてくる以外はずっと孤独だった。父の死を知ったのは葬儀から 2 年後。継母と義弟が初めて病室を訪れた時のことだった。

病棟での日々は「孤独という言葉では言い尽くせない」ものだったと伊藤は回想する。それでもなお、毎日絵を描くことを支えにしながら彼は何とか生きてきた。最大の後悔は結婚して自分の子供を持つことが叶わなかったことだという。

「あの病院は利益を上げる事しか考えていませんでした。入院患者一人につき、政府から年間 500 万円が支給されていたのです。ホームレスの男性が連れてこられて 46 年間も入院させられていたケースもありました」と伊藤は説明する。

伊藤は国の精神医療政策に問題があったとして、政府に 3300 万円の損害賠償を求める裁判を起こしているが、彼の最大の目的は不当に入院させられている多くの人々を解放することだと話す。

「彼らにも社会復帰を果たしてほしいのです。私のように」



◆おすすめ図書

「母よ 嘆くなかれ」

パール・バック著（1892～1973）

著者は「大地」等で知られるノーベル賞作家のパール・バックです。彼女には知的障害のある娘があり、母親として苦悩し、闘い続けた愛と勇気の手記です。知能の発育が困難な子どもへの社会の無理解と偏見に悲しみ苦しみながら、人間性の尊重を真摯に訴えた不屈の名作です。日本にも一時滞在したことがあり、精神障害のある子どもに対する日本人の対応も描かれています。寛容な日本人として描かれています但实际上はどうだったのでしょうか。

障害のある子どもを持った親の気持は時代が変わっても変わりません。障害のある子に向けられる世間の冷たい目、自分が死んだ後、誰が面倒見てくれるのだろうという不安。「大地」にも主人公の善良な農民とその家族に知的障害のある娘が登場します。この作品にもパール・バック自身の娘へのあたたかい眼差しが投影されています。

時間のある方は「大地」も読まれてみてはいかがでしょうか。（S.S 記）



NHK ETV 特集 2021. 7. 31

「日本最大の精神科病院新型コロナ専門病棟の実態に迫るドキュメント」を見て

この特集は日本最大の精神科病院である都立松沢病院が、他の病院で新型コロナに感染した精神障害者を次々と受入れ、闘う姿を密着取材したものです。精神疾患の上にコロナに感染した人々を受け入れてくれる所は殆んどなく、元の病院では

十分な手当てをしてもらえずに、汚れた下半身のまま運びこまれる患者もおり、「これが我が国の精神障害者が置かれている実態だ」と齋藤院長は嘆かわし気に訴えていました。また、精神障害者が十分な治療を受けることが出来ない理由に精神科特例があると重要な点を指摘していました。その一方で、日本精神科病院協会の山崎学会長の「自分たちは社会の行き場のない人たちを預かってやっているんだ」と言わんばかりの言葉に、我が国の精神科医療がなかなか改善されない原因はまさにここにあり、と強く思わせられました。

このような番組はもっと早い時間に放送し、国民に広く知ってほしいと思いました。

また、2021. 1. 9 時点の報道・病院報等によると、全国で陽性患者数 1,648 人 死亡患者数 30 人 職員ら 467 人合計 2,115 人 患者の感染は国内感染率の **3.6 倍** 死亡 **4.6 倍**とのこと。報告されない数字も含めれば実態はもっと酷いのではと想像されます。

（nhk 松沢病院で検索すると詳しく見ることができます）
（谷田川記）

精神保健福祉ボランティアグループ こんぺいとうのお知らせ

- 9月11日（土） お茶会 中央公民館和室
 - 9月18日（土） 定例会 福祉会館第3会議室
 - 9月25日（土） お茶会 福祉会館第2会議室
 - 10月9日（土） お茶会 中央公民館和室
 - 10月16日（土） 定例会 福祉会館第3会議室
 - 10月23日（土） お茶会 中央公民館和室
- 開始時間 いずれも 13:30～ お茶会参加費 100 円

❖2021 年度精神保健福祉ボランティア講座
11/13（土）、20（土） 10:00～12:00 福祉会館第2
会議室 ❖2021 年度会費は活動時にお支払いいた
だくか下記口座への振り込みをご利用下さい。
年会費 2400 円・賛助会費 1 口 1000 円（何口でも可）
横浜銀行平塚支店 店番 641 普通口座 1844869
精神保健ボランティアグループこんぺいとう石川ひろみ